

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
1 ICTの効果的な活用や様々な学習形態を工夫することで、主体的・対話的で深い学びを実現し、論理的思考力、批判的思考力及び課題発見・解決能力を育成する。	① ICT機器によるGoogleclassroom、ロイロノートといったアプリケーションを積極的に活用し、効果的な使い方を研究し、授業改善を実践する。	教務課 各教科	ICT機器によるGoogleclassroom、ロイロノートといったアプリケーションの活用により、学習効果が高まった(aよく+bやや)と感じている生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	87.6% B (a 35.8%+b 51.8%) <86.4%> 1年 85.5% B (a 35.9%+b 49.6%) <87.0%> 2年 92.8% A (a 43.0%+b 49.8%) <80.6%> 3年 84.5% B (a 29.2%+b 55.3%) <92.3%>	a評価+b評価が87.6%となり、A評価に近いB評価であった。昨年度の中間評価は86.4%で昨年度より僅かに上昇している。また、昨年度の最終評価も87.7%でA評価に近いB評価であり、高い水準を維持している。よって、昨年度、今年度と授業等でGoogleClassroom、ロイロノートなどのアプリケーションの活用が増え、学習効果が高まったと感じている生徒が多数いる好ましい状況が続いている。教員のアンケートによると、教員が授業でGoogleClassroom、ロイロノートなどのアプリケーションを活用している割合が75.5%であったことと符合する。今後はA評価を達成できるように、教員間でICT機器活用について情報を共有しながら授業改善に取り組んでいきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	② グループワークやペアワークなどの授業形態を積極的に取り入れ、生徒の対話の場面を設定し、教師による講義中心型の授業からの脱却を図る。	教務課 各教科	日々の授業において、グループワークやペアワークなどの授業形態を取り入れ、生徒の対話の場面を(a多く+b時々)設定している割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	79.6% B <69.2%> (a 38.8% + b 40.8%)	a評価+b評価が79.6%で昨年度の中間評価より10%も上昇した。「c:あまりあてはまらない」が昨年度の30.8%から20.4%と10%減少し、「d:あてはまらない」は0%である。結果、昨年度のC評価からはほぼA評価に近いB評価となった。このデータから、本校においては年々、講義中心型の授業からの脱却が進んでいると判断できる。今後はさらにその傾向が進み、最終評価ではA評価になることを期待したい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	③ 授業において、生徒が自ら課題を見つける活動を取り入れ、教師と生徒及び生徒同士が意見交換する場面を積極的に設けることで、論理的思考力や批判的思考力を育成する。	教務課 各教科	日々の授業において、生徒が自ら課題を見つける活動を取り入れ、教師と生徒及び生徒同士が意見交換する場面を(a多く+b時々)設定している割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	83.7% A <78.8%> (a 30.6% + b 53.1%)	重点目標1の③の「教師と生徒及び生徒同士が意見交換する場面を設定すること」は、重点目標1の②の「グループワークやペアワークなどの授業形態を取り入れ、生徒の対話の場面を設定すること」と関係していると考えられる。重点目標1の②がA評価に近いB評価になったように、重点目標1の③もa評価+b評価が83.7%で80%を超え、A評価になった。昨年度の中間評価は78.8%、最終評価は76.4%でもB評価であった。この重点目標1の③において大事なことは、授業で生徒が自ら課題を見つけることができるような内容で問いかけをする技術である。今後は、この点にも留意して授業改善を図っていきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
2 個別面談の充実、探究活動を主とする学習活動、さらにはデジタル・理数分野への理解を深める教育活動を積極的に行い、生徒一人ひとりの可能性を引き出し、早期から進路調べやキャリア教育を積極的に行うことで、進路実現に向けての意欲と主体性を育む。	①	進路指導課 学年 教科	面談や進路学習、進路の行事を通して、自らの進路選択に関する知識を十分に得ることができた(aよく+bやや)とする生徒の割合が、 A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 75%以上	87.1% B (a 31.2%+b 55.9%) <85.4%> 1年 85.9% B (a 31.6%+b 54.3%) <79.0%> 2年 87.5% B (a 29.8%+b 57.7%) <84.7%> 3年 87.8% B (a 32.2%+b 55.6%) <93.1%>	全体値を昨年の同時期と比較すると、2%弱上昇している。 1年生対象の大学見学会を6月に実施しており、大学で行われている講義や研究を生徒が身近に体験する機会となった。2年生では、7月の大学出張講義を通して大学での学びに直に触れることができた。また、その放課後に行われた大学説明会では、1年から3年まで、多くの生徒が参加していた。これらのことなどが数値全体を押し上げることに繋がったといえる。今後も進路について具体的に考えることができる機会をつくっていきたい。	CまたはDの場合、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	②	探究・DX推進室	(1・2年生)総合的な探究の時間を始めとする様々な探究的な活動を通して、社会問題により関心が高まり、卒業後の学びたい学問分野・領域等(将来やりたい仕事等)が年度当初に比べ、より明確になった(aよく+bやや)と感じている生徒の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	74.9% B (a25.3%+b49.6%) <73.9%> 1年 75.7% B (a24.4%+b51.3%) <63.4%> 2年 74.0% B (a24.9%+b49.1%) <77.6%> 3年 75.2% B (a26.4%+b48.8%) <80.9%>	昨年度の1年生はa評価+b評価が63.4%だったが、今年度の1年生は75.7%と増加させることができた。昨年まで行っていた地域探究を廃止しミニ探究という形で課題や問いと向き合うことに焦点を置いたことが要因だと考えている。2年生は1年次a評価+b評価が63.4%だったが、今年度74.0%に上がっているため、クラスを解体し、自分の興味があるテーマでチームを作り、グループで探究活動を行うことはやりたいことを明確にしていく上で重要な取組だと感じている。3年生は今年度から個人探究に取り組んでいるが、2年次のa評価+b評価77.6%から75.2%と少し下げる結果となった。しかし個人探究を深めていく時期はこれからであるため、9月、10月と経て卒業後に学びたい学問分野・領域をより明確にさせていきたい。いずれの学年においても担当者や担任が生徒たちと質の高いコミュニケーションを行うことができるかどうかで探究の質が大きく変わっていくため、再度教員に対して探究活動の必要生やメンターとしての指導方法を発信していきたい。	CまたはDの場合、改善策を検討	年度末に生徒アンケートにより評価する。
	③	探究・DX推進室	探究的な活動の過程(課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現)において、数理・データサイエンス・AIなどを適切に活用できる(aよく+bやや)と感じている生徒の割合が、 A 75%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	12月に集計  【参考:R6最終評価の数値】 69.6% B (a 13.5%+b 56.1%) <R6新設の設問> 1年 73.4% B (a 11.9%+b 61.5%) 2年 60.7% B (a 7.9%+b 52.8%) 3年 76.3% A (a 22.3%+b 54.0%)	総合的な探究の時間において、1年生の2学期はデータを分析する力を養うことに焦点を置き、活動を行う予定である。2年生、3年生は課題設定の場面などで生成AI(Gemini)を活用し、探究活動を行っている。また教員研修としてデータサイエンス研修(Tableau研修)と生成AI研修を行い、教員の指導力の養成も行っている。さらに探究・DX特別企画として、希望者を募り、滋賀大学データサイエンス学部でのデータサイエンスの講義や企業のDXの見学などのイベントも現在計画中である。	CまたはDの場合、改善策を検討	12月に学校評価にて評価する。
	④	進路指導課から各学年、教科に方針を発信することにより、教員全体の相互理解を深め、生徒の進路志望を実現するための学力向上の取組を組織的に行う。	進路指導課 学年 教科	学問分野・領域等が一致している割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満  進路を実現するため、学力を向上させることができた生徒の割合が  A 65%以上 B 55%以上 C 45%以上 D 45%未満	年度末に集計  ※参考【成果指標】(生徒) 3年生:1学期末に生徒が志望した学問分野・領域等と、進学先の学問分野・領域等が一致している  年度末に集計  ※参考【成果指標】(生徒) 1・2年生:学力を向上させることができた ※総合学力テストの国数英3教科総合の全国偏差値で比較(1年は7月と1月、2年は1年7月と2年1月)	上記2-①での取組と連動し、各学年と協力しながら学問分野への興味や社会との関わりをもった進路研究を進めている。大学見学・大学出張講義・模試と連動した進路探究など、今後も生徒の進路研究が進むよう学年と協力しながら進めていきたい。  担任との面談や進路ガイダンスなどによる進路意識の高まりが、効果的に学習意欲につながっていくよう、各学年団と密な連携をしていきたい。また、進路実現のために生徒の自己調整力に加え、自律型学習力を育てていきたい。	CまたはDの場合、改善策を検討

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
3 教職員はICTを効果的に活用し、生徒の教育活動における個別最適化を図るとともに、多忙化の改善に取り組む。	① ICT教育支援サービスを活用したり、課題を精選するなどし、個別最適な学びの実現を目指す。	各学年	ICT教育支援サービスを活用することや、朝学習や課題に取り組むことで、自らの学力を高めることができた(aよく+bやや)と考える生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	68.9% C (a23.3%+b45.6%)<75.2%> 1年 74.0% B (a26.1%+b47.9%)<74.3%> 2年 65.3% C (a21.5%+b43.8%)<70.1%> 3年 68.1% C (a22.7%+b45.4%)<82.0%>	【1年】「1. あてはまる」の回答が昨年度より3%高い。スタディサプリEnglishについては、取組状況や目標が明確な数値で表記され、意欲の向上につながっている。スタディサプリ(3教科)については各教科の取組に関するばらつきを解消していく。朝学習、課題の取組は大変充実しており、テストの点数につながったという達成感を励みにさせながら取組の質を更に高めていきたい。  【2年】各教科では、生徒につけさせたい基礎学力の教材を課題として提供し、弱点を認識させるとともに再指導などを行っている。この7月よりスタディサプリの配信等で「情報」の復習を始めている。大多数の生徒にとっては情報の授業がもう受けられないため、ICT教育支援サービスを利用して朝学習・課題に「情報」も取り入れ、学力を担保していきたい。  【3年】「情報I」の動画を朝学習用に配信した。生徒の学習の理解度に応じて学習用アプリ内の動画視聴と確認テストの活用をはたらきかけている。今後は小論文講座や総合型選抜対策などの動画を紹介し活用するよう働きかけていく。	Dの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	② 業務負担の軽減や時間管理の改善などにより、職員の多忙化改善を進める。	副校長 教頭	時間外勤務が80時間を超える教員の月平均の人数が A 0人 B 2人未満 C 3人未満 D 3人以上	4~7月平均2.0人 C <(昨年度4~7月平均 2.5人 C)>  (単位:人) 4月5月6月7月8月9月10月11月12月 平均 80時間以上 3 1 1 3 2.0 うち100以上 0 0 0 0 0.0  <R6:80以上 5 7 3 1 1 4 1 1 0 2.5>	4~7月の長時間勤務者数の平均は2.0人で、昨年度の2.5人、一昨年度の4.5人と比べ減少傾向にあるがC評価となった。定時退校日の設定、業務負担軽減に向けたICT活用等これまで一定の効果があった取組を継続しつつ、生徒を信じて任せた方がよいことはいないか、必ずしもやらなくてもよいことはいないか、AIを活用し効率化できることはないかをさらに深掘りし、多忙化改善につなげていきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討する。	勤務時間記録により年度末に評価する。
4 部活動や生徒会活動の活性化とともに、地域行事への積極的参加を通して地域貢献に努める中で、視野を広げつつチャレンジ精神やレジリエンスの涵養を図り、明るく活力ある学校づくりを推進する。	① PTA活動等への保護者の積極的な参加を促し、本校の教育活動をバックアップしていただく。	総務課	学校行事やPTA活動で保護者が来校した、または職員とのやりとりを電話などでした回数の平均が2回以上の割合が A 60%以上 B 50%以上 C 40%以上 D 40%未満	来校または職員とのやりとりした回数が  5回以上 4.1%<4.8%> 4回 2.7%<2.7%> 3回 14.2%<14.6%> 2回以下 79.0%<77.8%>	3回以上来校または職員とのやりとりをされている保護者が21.0%である。昨年の同時期と同じような数字である。7月までに保護者懇談、進路説明会、総会、学年説明会、入学式、挨拶運動があり、1~2回足を運んで頂いている。8月には明倫祭、11月には教育ウィークがあるので、来校または職員とのやりとりを通し学校での活動や生徒たちの様子を知ってもらいたい。	Dの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	② 本校の教育活動、生徒の活動の成果をホームページ上に掲載し、広く情報を発信する。	総務課	ホームページ上のアクセス数が月間平均で A 80,000以上 B 70,000以上 C 60,000以上 D 60,000未満	ホームページのアクセス数は(単位:件数)  4月 154,953 <73,115> 5月 101,144 <79,052> 6月 93,272 <124,258> 7月 95,732 <161,570>  ※参考 月間平均 111,275 <109,499> A評価	各課・学年行事や部活動について、毎日の更新ができるよう呼び掛けしており、また昨年度より、学年だよりを紙の配付ではなくホームページ掲載とした。これらの取組のためか、アクセス数は前年度の1学期月間平均とほぼ同数となり、高い水準を維持している。今後も掲載内容についてPTAの意見等を伺い工夫を続けていく。	Dの場合は、改善策を検討	年度末に評価する
	③ 部活動の加入を促し、学校全体の活性化を図ることで、生徒のチャレンジ精神の向上とレジリエンスの獲得を目指す。	生徒課	1,2年生の部活動の加入率が A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	85.5% A <86.9%>  1年 80.7% A <80.5%> 2年 89.7% A <94.5%>	昨年度より部活動の入部を自由にしたが、入学後部活動加入の良さ等を強調したこともあり、加入率は高い数字を保つことができたと考えられる。また、制度を変更して2年目でもあり、昨年度は途中退部した生徒もいたため、今後どのような推移になるかを見守る必要がある。	Dの場合は改善策を検討	12月に評価する。
	④ 生徒会行事、地域の行事への主体的な参加を促し、生徒一人ひとりが充実感・達成感を得ることができる取組を推進する。	生徒課	委員会・生徒会活動、地域の行事に主体的に参加し、充実感・達成感を得ることができた生徒(aよく+bやや)の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	62.2% D (a24.4%+b37.8%)<62.6%>  1年 61.6% D (a27.4%+b34.2%)<59.8%> 2年 61.5% D (a25.7%+b35.8%)<61.2%> 3年 63.4% D (a21.0%+b42.4%)<67.1%>	部、委員会によっては積極的に地域の行事に参加しているのだが、校内の委員会活動は活発ではないのが、現状である。委員会の担当の教員や生徒に委員会活動の大切さを理解してもらおうとともに、生徒が学校生活に充実感が得られるよう工夫していきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
5) 節度ある生活習慣の確立に努め、自ら挨拶し、読書に親しみ、ボランティア活動等にも積極的に参加する心豊かな人材の育成を図る。	① 登校指導や生活指導などを通して、挨拶がしっかりできる人間の育成を図る。	生徒課 各学年	朝の挨拶運動などで、生徒同士や教職員、外部からの来客に対し、進んで自分からしっかり声を出し挨拶できた(aよく+bやや)生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	84.2% A (a36.3%+b47.9%) <84.7%> 1年 83.7% A (a36.3%+b47.4%) <83.3%> 2年 80.7% A (a36.2%+b44.5%) <84.7%> 3年 87.5% A (a36.3%+b51.2%) <86.2%>	生徒は自分から進んで挨拶をしていると答えているが、教員からは同じように感じていない意見もある。最近では声を出して挨拶をする機会が減ってきているので、教員側からも積極的に生徒へ挨拶するよう努めていきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	② 登校指導や生活指導などを通して、自ら身なりを正すことで規範意識を育成する。	生徒課 各学年	制服を意識的に正しく整えている(aよく+bやや)生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	98.1% A (a68.3%+b29.8%) <98.0%> 1年 98.7% A (a74.8%+b23.9%) <98.6%> 2年 99.3% A (a69.1%+b30.2%) <97.9%> 3年 96.6% A (a62.4%+b34.2%) <97.3%>	最近では多くの学校で制服の着こなしを多様化させている状況があるが、制服の着こなしについては、様々な意見があるため、今後も教員間で共通理解をもって指導できるよう努めていきたい。	B以下の場合には、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	③ 交通安全教室や街頭指導を通して、自転車の安全運転の励行を図る。	生徒課 各学年	交通ルール(自転車運転でイヤホン着用や並列走行をしない)を遵守している(aよく+bやや)生徒の割合が A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	97.1% B (a69.5%+b27.6%) <94.6%> 1年 97.0% B (a72.2%+b24.8%) <93.9%> 2年 96.2% B (a68.3%+b27.9%) <96.2%> 3年 98.0% A (a68.5%+b29.5%) <93.5%>	自家用車との接触事故の発生や一般の歩行者からも注意の電話を受けており、自分だけでなく他者の命を守るためにも交通ルールの遵守について継続して指導していきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	④ 学校内外のボランティア活動への積極的な参加を促すとともに、ボランティアに参加したことの達成感や地域貢献への意識を高める。	生徒課 各学年	ボランティア活動に、積極的に参加した生徒(aよく+bやや)の割合が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	64.4% B (a22.5%+b41.9%) <60.4%> 1年 70.1% A (a24.4%+b45.7%) <59.1%> 2年 59.2% C (a21.5%+b37.7%) <58.5%> 3年 64.7% B (a22.0%+b42.7%) <64.0%>	一昨年、部活動単位で複数回ボランティア活動を計画・実施する新しいかたちに変更してから、多くの部が10月を中心に活動している。今後このかたちが定着することによって、地域活動への達成感が高まることに期待したい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	⑤ 生徒の良好な人間関係作りを支援する。	相談室 各学年	学校生活が楽しいと感じる生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	93.6% A (a48.9%+b44.7%) <92.0%> 1年 95.7% A (a56.0%+b39.7%) 2年 94.3% A (a49.8%+b44.5%) 3年 91.2% A (a42.4%+b48.8%)	昨年度の最終評価と同ポイントであり、ほとんどの生徒が学校生活について肯定的に高い評価をしている。一方で、1.5%が「全く当てはまらない」と回答しており、こうした状況への対応が重要であると考えている。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	⑥ 情報の収集、共有を密に行い、困難を抱えた生徒に対して早期に対応し支援する。	相談室 生徒課 各学年	いじめや人間関係などの生徒の変化に対して、素早く察知し、対応することができたのアンケートをとり、あてはまる割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 80%以上 D 80%未満	いじめへの早期の取組 100% A (a47.1%+b52.9%) <100%> 問題への早期の対応 98.0% A (a39.2%+b58.8%) <96.3%>	昨年度は、中間A(100・96.3)→最終C(88.7・88.7)となったことをふまえ、問題が表面化してくる夏休み明け以降に向けて、対応を充実させていきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	⑦ 定例清掃の活動を通して、環境美化意識を高める。	保健環境課	環境美化を意識し真面目に清掃に取り組んでいる生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	93.6% A (a47.0%+b45.6%) <93.3%> 1年 91.9% (a45.7%+b46.2%) <91.0%> 2年 92.0% (a44.5%+b47.5%) <94.9%> 3年 93.6% (a50.2%+b43.4%) <93.9%>	各学年が環境美化について真面目に取り組んでいる。全体でもaのポイントが昨年よりも高くなり、生徒の学校環境美化に対する意識が高くなったと感じられる。また、学年比較では学年が上がることに数値が高くなり環境美化に対する意識の向上が見られる。	CまたはDの場合は、改善策を検討	年度末に評価する。
	⑧ 図書委員による、図書便り・書籍紹介等の作成・発行等の図書案内の取組や一斉読書指導によって、読書の習慣化を促すとともに、探究活動等においても図書室を活用していく。	図書室	生徒一人あたりの年平均貸出冊数が A 5冊以上 B 3冊以上 C 2冊以上 D 2冊未満	年度末に集計 参考 1.0冊 D <0.6冊 (R6 8月末時点)>	新入生図書室ガイドンス、総体・総文時の1年生の一斉読書で例年どおり、本校図書室利用方法や読書に親しむ機会を設けている。図書だよりでの推薦図書紹介、ビブリオトークでの生徒推薦図書の紹介の効果を2学期以降に期待したい。今年度1年生の来室、貸出が例年より多い。その分昨年同期よりも平均貸出冊数が増えた。ガイドンスでの呼びかけやBGM使用の雰囲気作りの効果とも言える。1、2年生の「総合的な探究の時間」での調査活動等での図書室利用増にも期待し、生徒が読書習慣をつけることに努めたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	年度末に評価する。

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
6 生徒の健康保持や安全確保に関する意識を高め、危機管理体制を構築していく。	① 健康・安全・防災への意識を持ち、危機に際して自ら判断し、行動できる生徒を育成する。	総務課 各学年	健康・安全・防災への意識を高める取組を行っている生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	83.2% A(a33.2%+b 50.0%)<R7新設の設問>  1年 84.7% A (a 36.8%+b 47.9%) <-%> 2年 86.1% A (a 34.0%+b 52.1%) <-%> 3年 79.6% B (a 29.8%+b 49.8%) <-%>	今年度の石川県による「県立学校における災害対応力の強化に向けて」の取組の一環として、生徒の健康・安全・防災への意識を高める取組の効果を計る指標として新規に導入した項目である。避難訓練をはじめ各種の学校行事および日頃から、自分自身で健康・安全・防災への意識を高める取組を行っている生徒が全体の8割を超えている。今後、さらに多くの生徒の意識を高めるように、各学校行事をその機会としてとらえ、適時指導していく。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。
	② 危機管理意識を高め、不測の事態においても適切に対応できる組織体制を構築する。	副校長 教頭	危機管理意識を高め、不測の事態に対応する知識・技能を高める取組を行っている教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	88.2% A <R7新設の設問>  (a 35.3% + b 52.9%)	今年度の石川県による「県立学校における災害対応力の強化に向けて」の取組の一環として、職員の危機管理意識向上のための取組の効果を計る指標として新規に導入した項目である。学校評価ではa+bの数値が88.2と高くなっているが、危機管理意識を高く持ち、危急の際は率先して判断・行動し、生徒の安全を確保すべき職にある教職員の心の持ち様としては、aの数値が35.3にとどまっていることは肯定的にとらえるべきではなく、さらなる意識の向上に努める必要があると考える。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する。